

総 説

脱毛症に対する東西両医学的考察 — 『黄帝内経』 と毛髪との関係性について —

王 財源¹⁾ 渡邊 真弓¹⁾

1) 関西医療大学 保健医療学部自然科学ユニット

要 旨

本研究は伝統医学に基づいた毛髪と『黄帝内経』素問や靈樞との関係性を、古典文献を用いて明らかにし、さらに現代生理学的考察を行うことにより、伝統医学と現代医学との整合性を検討したものである。

とくに『巢氏諸病源候總論』『備急千金要方』等々には、脱毛をはじめとする、頭部の毛髪における諸症状に共通して「気」「血」「津液」が関係する記述があった。これらは後世の『医心方』にも影響を与えたのである。

また、西洋現代医学的な視点で考察を加えた。本研究で「気」(陽)、「血」と「津液」(陰)の概念に相当するもの一つとして、免疫細胞である白血球に着目した。なぜならば、「気」「血」「津液」も白血球も、ともに全身を循環して健康維持を行うからである。

白血球の基本は、マクロファージである。このマクロファージから、二種類の細胞が生まれた。一つは顆粒球であり、もう一つはリンパ球である。これらの白血球は、陰と陽の働きにも似た二つの自律神経(交感神経と副交感神経)のバランスに影響される。白血球表面にある受容体を通じて、全身のほぼすべての臓器と同様に自律神経の支配を受ける。

脱毛において証が異なると、自律神経の状態・白血球分画が異なることが近年、明らかにされた。このように、現代医学的概念に『黄帝内経』素問や靈樞などにおける「気」「血」「津液」にみる伝統医学的理論を結合させ、東西両医学の二つの視点より、脱毛症に対する病理を客観的に考察できる可能性が示唆された。

キーワード：脱毛症 中国伝統医学 『黄帝内経』 白血球分画 自律神経

I 緒 言

中国伝統医学を軸足として発展した東洋医学において、すでに脱毛症が古典医書である『黄帝内経』素問の中で「髮墮」として記載されている。『巢氏諸病源候總論』髮毛病諸候几十一論の「晝髮禿落候」「令長髮候」「令髮潤澤候」や朱橐撰『普濟方』等々には、「髮」に対する記載がある。これらは後世の『医心方』に影響を与えた。また、現代の中医学では気血兩虚、瘀血、血熱生風、肝腎陰虚の四つに「証」が分類し、各々の「証」が病因別に異なっている。そこで、今回は、中国の古典医書にみる「髮墮」と脱毛の関係について文献的検討を試み、最後に西洋現代医学的視点からも考察を加えた。

II 方 法

『漢書』¹⁾ 『諸子集成』²⁾ 『莊子』³⁾ 『論語』⁴⁾ 『抱朴子』⁵⁾ 等々の思想、哲学書、『黄帝内経』を始めとする下記の医書を用い、両者間の「気」についての概念を一部比較した。また、時代背景より考察を加えるために、社会風俗を記した『世説新語』(六朝)⁶⁾ 『事林廣記』(宋)⁷⁾ や、『人物誌』(魏)⁸⁾ 『挺経』(清)⁹⁾ 等々の文献を参照した。

医書原文は『重廣黄帝内経素問』影印本と、『黄帝内経素問校注』人民衛生出版社(2013)、明刊無名氏本『新刊黄帝内経靈樞』(内藤湖南旧蔵)を集録した『靈樞』日本内経医学会(2006)や『難経集注』¹⁰⁾、『巢氏諸病源候總論』¹¹⁾ 『備急千金要方』¹²⁾ 『本草綱目』¹³⁾ 『普濟方』¹⁴⁾、その他の資料を確認するために、影印文淵閣本『四庫全書』驪江出版社(1986)参考にした。なお、作業の迅速化のため『四部叢刊』『正統道蔵』『歴代

漢方名作選』『歴代鍼灸名作選』（繁体字図文版・凱希メディアサービス）を用い、先秦から清代前半に至る伝統医学と「髪墮」との相関性を考察し、西洋現代医学的視点からみた脱毛と「髪墮」について言及した。

Ⅲ 結 果

前掲の『黄帝内経』素問、靈樞。隋代の『巢氏諸病源候總論』卷四十八「頭髮不生候」や、唐代の孫思邈撰『備急千金要方』卷四十二「頭面風第八」。明代の李時珍撰『本草綱目』第五十二卷「人部一、乱発」、朱橚撰『普濟方』卷五十「鬚髮墮落論」等々にも身体と「髪」の関係に対する記述が随所にみられた。

まず、古典医書『黄帝内経』素問に記された「五蔵」と「髪」との関係について検証したい。

『黄帝内経』素問
六節藏象論篇第九

腎者、主蟄、封藏之本、精之處也。其華在髮、其充在骨。

（腎なる者は、蟄を主り、封藏の本、精の處なり。其の華は髮に在り、其の充は骨に在り）。

腎は蟄を蔵されている處であり、収蔵の根本をなすもので、精を貯える處ある。腎の榮華は頭髮に現れ、その充実している様子は骨にある¹⁵⁾。

『黄帝内経』素問
五藏生成篇第十

腎之合骨也。其榮髮也。

（腎の合は骨なり。その榮は髮なり）。

腎は骨に配合する。その榮華は髮に現れる¹⁶⁾。

ここには五蔵の「腎」と「髪」の関係が素問に記されていた。

次に、『黄帝内経』靈樞に記された「氣血」と「経絡」との関係について検証する。

『黄帝内経』靈樞
本藏篇 第四十七

経脈者、所以行血氣而營陰陽、濡筋骨、利關節者也。

（経脈なる者は、血氣を行らして而して陰陽を営み、筋骨を濡し、關節を利する者なり）。

経脈は、血氣が通行する所であり、身体の内外を営み、筋骨を潤し、關節の働きを滑らかにするものである

17)。

また、『黄帝内経』靈樞に記載された「氣血」が「髪」に与える影響について検証し、そこにみる「衛氣」の存在を提示する。

『黄帝内経』靈樞

歳露論第七十九

故月滿則海水西盛、人血氣積、肌肉充、皮膚緻、毛髮堅、腠理却、烟垢著。當是之時、雖遇賊風、其入淺不深。至其月郭空、則海水東盛、人氣血虛、其衛氣去、形獨居、肌肉減、皮膚縱、腠理開、毛髮殘、腠理薄、煙垢落。

（故に月滿つれば則ち海水西に盛ん、人の血氣積み、肌肉充ち、皮膚緻かく、毛髮堅く、腠理却¹⁸⁾ち、烟垢著く。是の時に当たり、賊風に遇うと雖も、其の入りや浅くて深からず。其の月郭空しきに至れば、則ち海水東に盛んにして、人の氣血し、其の衛氣去り、形獨り居り、肌肉減り、皮膚縦み、腠理開き、毛髮残われ、腠理薄く、煙垢落つ）。

よって、月が満ちているときは、海水は西に盛んになり、人の血氣も積み、肌肉は充実し、皮膚は緻かくなり、毛髮は堅く、腠理は閉じ合わり、皮脂が多いので表が堅くなる。この時に、かりに賊風の侵入に遇うと、浅く侵入するだけで深くはない。月が欠けると、海水は東に盛んになり、それに応じて人の氣血も虚し、その衛氣も去る。みた形は平常でも、肌肉は減り、皮膚は緩み、腠理は開き、毛髮は残われ、皮膚の筋目紋様は薄く、皮脂も剥落する¹⁹⁾。

ここには「氣血」が不足すると「衛氣」が去ることと、「皮膚」の滋養についても述べられている。

また、「津液」と「髪」の土台となる「皮膚」との関係についても検証する。

『黄帝内経』靈樞

五癰閉津液別第三十六

水穀皆入于口、其味有五、各注其海、津液各走其道。故三焦出氣、以温肌肉、充皮膚、為其津、其流而不行者為液。

（水穀は、皆、口より入る、其の味に五つ有り、各々其の海に注ぎ、津液は各々其の道に走る。故に三焦の氣を出だして、以て肌肉を温め、皮膚を充たし、其の津と為す、其の流れ行かざる者を液と為す）。

水と穀物はいずれも口から入る。それには酸、苦、

甘、辛、鹹の五種の味があり、それぞれが五臓と繋がって、五臓の海に注がれている、津液もそれぞれの道の流れ行く。よって、三焦よりその気が出て、筋肉を温め養い、皮膚を充実させる、それを津という。留まってめぐらないものを液という²⁰⁾。

『黄帝内経』靈樞

決氣篇第三十

上焦開發 宣五穀味 熏膚充身澤毛 若霧露之漑 是謂氣。

(上焦開發し 五穀の味を宣ぶ 膚を熏じ、身を充たし、毛を澤にす 霧露の漑ぐが 若し、是を氣と謂う)。

上焦が開通し 5つの栄養素は行き広く行き渡る。皮膚には燻べるように染み込み、全身にあまねく満たし、毛髪を艶やかにする。霧や露のように萬物を潤す、これを「氣」と呼ぶ²¹⁾。

『備急千金要方』

手太陰氣絶、則皮毛焦、太陰者行氣、温皮毛者也。氣弗營、則皮毛焦、皮毛焦、則津液去、津液去、則皮節傷、皮節傷者、則爪枯毛折²²⁾。

(手の太陰脈の気が絶えなば、則ち皮毛焦げ、太陰は氣を巡らせ、皮毛を温めるなり。氣營なわず、即ち皮毛焦げ、皮毛焦げらば、津液去る。津液去らば、則ち皮節を傷る。皮節を傷らば、則ち爪〈一説皮〉枯れ、毛が折れる)。

手の太陰脈の気が絶えると皮毛が焦げる。太陰脈は氣を全身に運び、皮毛を温める役割をする。気が作用しないと皮毛は焦げる。皮毛が焦げると津液がなくなる。津液がなくなると皮膚や関節が傷つく。皮膚や関節が傷つくと爪〈一説では皮〉が枯れ、毛が抜ける²³⁾。

上記、三つの文脈をみる限り、明らかに「津液」(陰)が「三焦」を介して「皮膚」を潤し、「髪」を滋養していることが理解できる。

また、隋代の巢元方撰(6-7世紀)『巢氏諸病源候總論』卷二十七に記載された「髮毛病諸候」にも「血」と「氣」が「経絡」を通じて、どのように「髪」の美しさと結びついているのかを検証したい。

鬚髮禿落候

足少陽膽之経也、其榮在鬚。足少陰腎之経也、其華在髮。衝任之脈為十二経之海、謂之血海、其別絡上唇口、若血盛則榮於頭髮、故鬚髮美、若血氣衰弱、経脈虚竭不能榮潤、故鬚髮禿落。

(足の少陽膽の経なり、その榮は鬚(あごひげ)に在り。足の少陰腎の経なり、その華は髮に在り。衝任の脈は十二経の海を為す、これを血海と謂う、その別は上唇口を絡い、若し血盛んなれば則ち頭に於いて髪が榮(さかえ)、故に鬚髮が美しく、若し血氣が衰え弱れば、経脈が虚竭(きょけつ)し、潤し榮えず、故に鬚髮禿落つ)。足の少陽膽経の榮華は鬚(あごひげ)にあり。足の少陰腎経の榮華は髮に在り。衝任の脈は十二経の海で、これを血海と言う、その別は上唇を絡い、もし、血が盛んであれば頭部の髪が榮(さかえ)、よって鬚髮が美しく、もし、氣血が衰弱すれば、経脈が衰え、潤って榮えることがない、したがって、鬚と髪が禿げ落ちるのである。

令長髮候

髮是足少陰之経血所榮也。血氣盛則髮長美、若血虚少則髮不長、須以藥治之令長。

(髪は足少陰の経、血、榮る所なり。血氣盛ん、即ち、髪が美しく長く、若し血虚少し、即ち、髪長からず薬を以て之れを治し長く令す)。

髪は足少陰の経脈で血が榮える所である。血氣が盛んだと、即ち、髪が美しく長くなり、もし、血が不足して少ないと、即ち、髪は長くならない、よって髪が長くならないと、薬を使って髪を治し、長くする。

ここには「氣血」の盛衰が、「髪」や「鬚」と結びつき、「氣血」の流れが「経絡」を介して美しい「髪」を生じる源泉であるという。

丹波康頼(912年-995年)の『医心方』には「氣血」が毛髪 of 育成と関係することを述べた文脈が、卷第四「治髮令生長方」にも記載されているので『巢氏諸病源候總論』と比較してみた。

治髮令生長方第一

病源論云

髮是、足少陰之経血所榮也。血氣盛、則髮長美、若、血虚少、則髮不長。故須以藥治、之令長也²⁴⁾。

(髪は是れ、足の少陰の経血の榮る所也。血氣盛んなれば、則ち髮美しく長ず。若し、血虚して少なければ、則ち、髪は長ぜず。故に須く、薬を以て之を治し長ぜしむる也)。

髪は足少陰の経血がめぐり、それによって養われているものである。血や氣が盛んになると髪は美しく長い。若し、血が虚して少なければ、髪は長く伸びない。ゆえに薬によって治療し、成長を促すのである²⁵⁾。

両書には共通して「足少陰之経」がみられることから、『巢氏諸病源候總論』の影響を受けていることがわかる。『医心方』と『巢氏諸病源候總論』の内容を比較しても、類似した文脈がみえることで理解できる。

『医心方』の著された時代は、984年の平安時代である。そのころの男性は、髪は長く伸ばしていたことが一般的であった。毛髪を頭頂部で結って、その上から冠をかぶっていたために禿や薄毛は、容貌上の美意識にも影響を与えた。おそらく、今より禿や薄毛に対する美意識は強かったことが考えられる。よって、当時の毛髪の状態が、「気血」の衰えによって生じると考えていた。そのために、髪の中の伸び方ひとつで、疾病の状況が反映していたものだと思われていたことが『医心方』にみえる。

そこで「髪」が「気」「血」と結びつくその根拠となる考え方を、明代にも引き継がれていたため、その文脈を上げて検証しておく。

『普濟方』卷五十

鬚髮墮落

夫足少陽。膽之経也。其榮在鬚。足少陰。腎之経也。其華在髮。衝任之脈。為十二経之海。其別絡上唇環口。若血盛。則榮於鬚髮。故鬚髮美。若血氣衰弱。経脈虚竭。故鬚髮禿落也。

(夫れ足少陽、膽の経なり。其の榮は鬚に在り、足少陰、腎の経なり。其の華は髮に在る。衝任の脈、十二経の海と為る。その別絡は上唇から口をめぐる。若し血盛ん、則ち鬚髮榮ん、故に鬚髮美しい。若し血氣衰えば、経脈が虚渴する。故に鬚髮禿げ落ちるなり)。

足の少陽膽経の、その榮華は鬚にある。足の少陰腎経の、その榮華は髮にある。衝脈と任脈は十二経絡の海である。その別絡は上唇より口を巡る。もし血が盛んであれば、すなわち鬚髮が榮える、よって鬚や髮は美しくなる。血と氣が衰えると、鬚と髮が落ち禿げるのである。

このように身体の「気血」の盛衰と「髪」の發育状態については、文献の随所に記されていた。

「気」については複数ある生理的な活動が記されている。例えば現代中医学の「気」の推動作用や温煦作用があることが知られている。「気」には温める作用と「血」を推し出して、「血」で全身を潤す作用があると言われているが、それらの概念が古典医書中のどこに記されるのかを検証する。

『難経本義』卷上

二十二難

氣主响之、血主濡之、氣留而不行者、為氣先病也。血壅而不濡者、為血後病也。故先為是動、後所生也²⁶⁾。

(氣はこれを响むるを主どり、血はこれを濡すを主る。氣、留りて行らざれば、氣の先ず病むるを為すなり。血、壅がりて濡さざれば、血の後れて病むるを為すなり)。

氣は温めることをつかさどり(温煦作用)、血は潤すことをつかさどる。氣が留まってめぐらなければ(推動作用)、氣が先に病む。血が塞がって潤さなければ、血がその後に病む。故に先には是動病をなし、後に所生病なる²⁷⁾。

『難経』には現代中医学でいう温煦作用や推動作用の概念が記されていた。「気」「血」の機能減退によって発生する疾病の特徴についても述べられている。

その「血」が不足すると「髪」に影響を与えることが『本草綱目』にも記されていた²⁸⁾。

『本草綱目』卷五十二

腎華在髮、髮者血之餘、血者水之類也。

(腎の華は髮にあり、髮は血の餘り、血は水の類いなり)。

腎の榮華は髮にある。髮は血の余りであり、血は水の類いである。

つまり、「髪」は「血」の余りであり、身体内の「血」が不足すると、「髪」を失うおそれがある。したがって、「髪」を維持するためには、「血」を推動する「気」の存在が必要である。

とりわけ陽性の氣に属する「衛氣」の特徴には、体表面を温めて外邪より身体を守るという防御的な免疫系機能の働きがあるのでこれを提示する。

『黄帝内経』靈枢

本藏編 第四十七

衛氣者、所以温分肉、充皮膚、肥腠理、司開闔者也。

(衛氣は、分肉を温め、皮膚を充たし、腠理を肥やし、開闔を司する所以の者なり)。

衛氣は、筋肉を温め(温煦作用)、皮膚を豊かに充たし(榮養作用)、皮膚の紋理を肌理細やかに調べ、腠理即ち発汗機構の開閉を制御している²⁹⁾。

ここに外邪より身体を防御するという「衛氣」の働きが、細菌などより身体を防御する西洋現代医学でいう免疫系機能と類似している点が見える。

以上の結果より古典医書には「髪」が「気」「血」「津液」と結びついていたことが理解できる。これらの結果

を踏まえて西洋現代医学の立場からの考察をしたい。

IV 考 察

古代中国医学に発祥した「気」の概念は現代の伝統医学にまで引き継がれている。前掲した「気」のひとつである「衛気」は体表面に存在する機能であり、粘膜と皮膚を介して侵入した邪気を排除する免疫系システムとも理解できる。

高橋は、自然免疫と獲得免疫との関係性に視点を置き考察を加え、全身の皮膚表面や粘膜を覆い、体内に侵入する邪気を制御する「衛気」が自然免疫を、体内を走行する血の統御を行う営気が獲得免疫である可能性も否定できないという。これらは昼夜二十四時間にわたって人体の自律神経の働きとなり、免疫と関係する仕組みについても述べている³⁰⁾。

『黄帝内経』靈樞

衛氣行第七十六

故衛氣之行一日一夜五十周於身、晝日行於陽二十五周、夜行於陰二十五周。

(故に衛氣の行は、一日一夜に身を五十周す、昼日は陽を行くこと二十五周、夜には陰を行くこと二十五周)。

衛気は一昼夜で身体を五十周周航している。昼には陽を二十五周周航している。夜は陰を二十五周している³¹⁾。

家本も、『靈樞訳注』の営衛生会篇で「衛気」はリンパ液とし、同篇の「布胸中走腋」の注記には「上焦は胃周囲のリンパ管である」「下焦は骨盤臓器を灌流するリンパ管である」とし³²⁾、本蔵篇に載る「衛気」についても「胃の上焦で飲食物から抽出されたリンパ液である」という³³⁾。上焦についても同書、決気篇の注記で「上焦は胃周囲より縦隔腔を上行するリンパ管である」と、「三焦」の機能と繋がっていることを指摘している³⁴⁾。

興味深いことに館野も「気」を液体と見立てている。それら「気」という液体の流れが止まったときに発病することから「気の液体病理学説」を論じている³⁵⁾。このことから「気」が免疫と深く結びついている可能性は否定できない。

また、前掲の「三焦」については、章太炎(1869年 - 1936年)の『章太炎論医集』には、水液の通路である「三焦」とリンパ系の関係について説いている³⁶⁾。
“三焦者自其液言、則所謂淋巴液淋巴腺。自其液所流通之道言 則所謂淋巴管”。

(三焦は、自ずからその液を言う、即ち、リンパ液、リンパ腺である。その液が流通する道が、いわゆるリンパ管である)。

“水之内源、即臟腑間之淋巴腺与管、外之水源、則肌腠間之淋巴腺与管也。肌腠間有毛細管、此云孫絡”。
(水の内源は、臟腑間のリンパ腺と管がある。外の水源は肌と皮毛の間のリンパ腺と管をいう。肌と皮毛の間には毛細血管があり、これを孫絡と言う)。

“藏府間略分三部、瀆者、則淋巴管之象、日如漚者、則淋巴腺凝如大豆之象、日如霧者、則淋巴腺凝如粟米叢集成点之象。此三象者、上焦、中焦、下焦所通有”。
(藏府の間では三部に分類している。瀆はリンパ管の象を現し、漚はこりこりした大豆の大きさのリンパ腺、霧はリンパ腺にあるこりこりした粟状の点状のものである。この3つの象は、上焦、中焦、下焦の通るところである)。

また、同書には「靈樞」と「三焦」の関係についても述べられている。

“靈樞称下焦別回腸、此所謂腸淋巴管也。又称少陽属腎、腎上連肺…。按腎腺入腰淋巴管、注胸管、会心肺諸腺、靈樞説得之。

(靈樞は回腸を下焦と称し、ここには腸リンパ管がある。また、少陽と称し、腎に属する。腎より上がって肺に連なる…。腎腺より腰リンパ管に入り、胸管に注ぎ、心肺の諸々の腺と結合する。靈樞では之を説く)。

章太炎は水液の通路となる「三焦」を、リンパ系として述べていることから、前出の結果から得られた靈樞にみる「三焦」の機能が現代医学でいうリンパ系と密接に関係しているという興味深い考察がある。

以上の文脈から、『黄帝内経』素問と靈樞には「髪」と「五蔵」、また「気血」が関係し、そこに「三焦」の働きが加わり、リンパ系を構成していることが考えられた。

つぎに伝統医学的視点と西洋現代医学的視点からの考察を深めたいと思う。

まず、古代の伝統医学的な視点からの考察では、『黄帝内経』素問、調経論をみると、肝は条達を好み、血を蔵し、気血を疏泄する。しかし、心理的なストレスにより自律神経に乱れを生じた場合、条達している「気」の

疏通が停滞し、それが肝気鬱滞を生じる。さらに、「気」の停滞は瘀血を生じ、新しい血を生じないために、「髪」が養われずに脱毛を起こす。

これらを西洋現代医学的な視点を用いて考えてみたい。上述したように、これまでに著者らは古典医書に基づいて「髪」には気（陽）、津液や血（陰）が大きく関与している可能性を検討した。

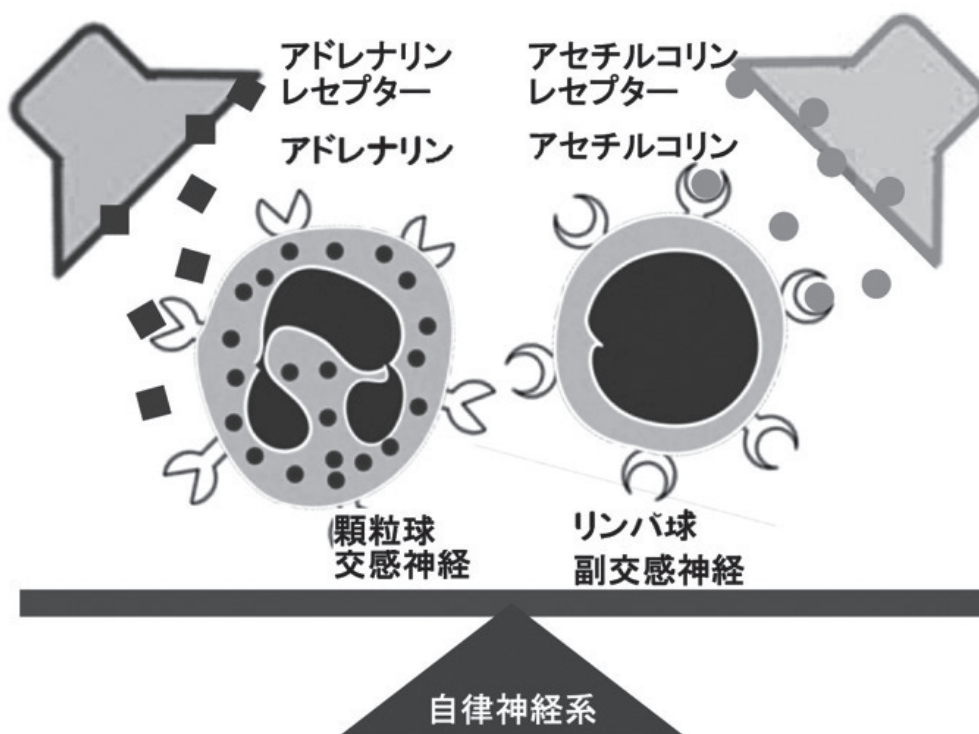
気（陽）、津液や血（陰）の概念に相当するものの一つとして、血液とともに全身を駆け巡り、そして身体を防御する機能に白血球があげることができる。本研究では、気（陽）、津液や血（陰）の概念に相当するもの一つとして、免疫細胞である白血球に着目した。なぜならば気（陽）、津液や血（陰）も白血球も、ともに全身を循環して健康維持を行うからである。白血球の基本は、マクロファージである。このマクロファージから、二種類の細胞が生まれた。一つは顆粒球であり、もう一つはリンパ球である。これらの白血球は、陰と陽の働きにも似た二つの自律神経（交感神経と副交感神経）のバランスに影響される。白血球表面にある受容体を通じて、全身のほぼすべての臓器と同じく、自律神経に支配されるからである。

脱毛において、「証」が異なると、自律神経の状態・白血球分画が異なることが近年、明らかにされた³⁷⁾ -³⁹⁾。自律神経には二種類あり、ストレス時には交感神

経が緊張し、リラックス時には副交感神経が優位となる。これらが、中国伝統医学の陰と陽の概念と同様に、相互にバランスをとり、健康を維持している（図.1）。このように、現代医学の概念に伝統医学的理論を結合させ、東西両医学の2つの視点より、脱毛症に対する病理を客観的に考察できることが示唆された。しかしながら、前述した脱毛症においては、交感神経緊張が、アドレナリン濃度の上昇を導く。その結果、アドレナリン受容体を持つ顆粒球は、交感神経の刺激を受けて数が増える。顆粒球は体内に進入した細菌などを飲み込み処理する。増加した顆粒球は常在菌の刺激を受けるが、常在菌がなくともそれ自身が活性化される。その結果、顆粒球が放出した活性酸素が組織を破壊してしまうことが、脱毛を引き起こすと考えられる⁴⁰⁾、⁴¹⁾。この他にも、血液の栄養を受けられない脱毛症も存在する。つまり、「証」が異なる脱毛症の背景には、異なる自律神経の状態・白血球分画が存在する。

リンパはリンパ管に間質液に流入したものであり、リンパ系は毛細リンパ管に始まり、集合リンパ管を経て鎖骨下静脈に注ぐ途上、リンパ節において異物の大部分を取り除く。血液同様、全身を駆け巡るリンパの流れは平滑筋のみならず骨格筋の運動、動脈拍動、収縮、呼吸・消化運動の影響を受けることから、リンパの流れ自体は少ないながらも、自律神経の影響を完全に否定するも

図1



のではない。

V 結 論

脱毛症は歴代医家の古典理論に基づき発展し、結果的に弁証というシステム化された現代の中医学を生み出した。その根拠は『黄帝内経』素問、靈樞などの古典医書の随所に「気」「血」「津液」の働きが記されていることにある。とくに古典理論をみると「気」のなかでも「衛気」の存在は西洋医学の免疫系機能と深く係わり、その働きが失われたとき、「髮墮」と称される。また、「三焦」とよばれる「気」の流れる通路にはリンパ系が相当する。「気」は陽に属し、「血」と「津液」は陰に属する。ここには陰と陽の概念があり、それらは自律神経の活動を想起させる。陽は「動」で興奮性をもち、陰は「静」で安静の性質をもつ。もし、病が身体に反応すると陽証では実、熱、表となって現れ、神経系が興奮し、新陳代謝の過剰な亢進がみられる。陰証では虚、寒、裏の証となって現れ、身体の機能全般が衰え出し、新陳代謝の低下が「髮」の衰えを招く。このような病の状態には自律神経の機能の活動によって作動する免疫系システムが深く関わる。この現状を考慮してもその研究意義は大きい。よって、これら中国伝統医学を西洋現代医学的な概念との融合から考えられることは、古代中国伝統医学に継承される「三焦」と「気血」、とりわけ「気」の中でも「衛気」が「三焦」を介した免疫学的な働きが「髮」の発育に影響を与え、自律神経系による免疫機能が「髮」の発育と深く関与することが示唆された。その結果、中国古代医書に記された「気」（衛気）と「血」「津液」の不足から生じた脱毛を「髮墮」として記載した。

附記、尚、本研究に開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) (漢) 班固撰、(唐) 顔師古注『漢書』、商務印書館、1955年。
- 2) 『諸子集成』中華書局香港分局、1978年。
- 3) 市川安司『莊子』新釈漢文大系第8巻、明治書院、2008年。
- 4) 吉田賢抗著、新釈漢文大系第1巻、『論語』明治書院、1983年。
- 5) 新編諸子集成、王明撰『抱朴子内篇校釈』中華書局、1985年。
- 6) 蔣凡、李笑野、白振奎評注『全評新注世説新語』人民文学出版社、2009年。
- 7) 陳元靚撰『事林廣記』中華書局、1999年。
- 8) 劉邵撰、馬駿、朱建華譯注『人物志』貴州人民出版社、1998。
- 9) 宋学海主編、曾國藩著『挺經』雲南人民出版社、2011年。
- 10) 日本内経医学会『難経集注』（濯纓堂本）2002年。
- 11) 小曾戸洋著、篠原孝市ほか編、東洋医学善本叢書6『諸病源候論』東洋医学研究会、1981年。
- 12) 孫思邈著『備急千金要方』道林養性第二（江戸医学影北宋刊本）人民衛生出版社影印、1982年。
- 13) 李時珍編著、張守康校注『本草綱目』第五十二巻、人部一、乱発。中国中医薬出版社。1998年、1193頁。
- 14) 朱橚『普濟方』第二冊、身形、人民衛生出版社、1959年、153頁。
- 15) 庄司良文訳所載の『現代語訳・黄帝内経素問』東洋学術出版社、2006年、183-188頁を参照し一部を改めた。
- 16) 前掲。『現代語訳・黄帝内経素問』189-190頁を参照し一部を改めた。
- 17) 前掲。前田繁樹訳所載の『現代語訳・黄帝内経靈樞』、2007年、62-63頁。
- 18) 前掲。白杉悦雄訳所載の『現代語訳・黄帝内経靈樞』、2007年、501頁の訳注に鄒は郤の別体で、際に通じるが、ここでは郤の俗写と解する。郤は俗に却に作るとある。
- 19) 前掲。『現代語訳・黄帝内経靈樞』499-501頁を参照し一部を改めた。
- 20) 家本誠一著『黄帝内経靈樞訳注』医道の日本、第二巻、241-242頁、2008年参照し一部を改めた。
- 21) 前掲。『黄帝内経靈樞訳注』182頁、2008年。
- 22) 東洋医学善本叢書10、『備急千金要方』（中）オリエント出版社、1989年、534頁。
- 23) 千金要方刊行会編『備急千金要方』（下巻）毎日新聞社、1976年、47-48頁。
- 24) 日本古医学資料センター編、『医心方』（覆刻版299号）講談社、1973年、一葉裏。
- 25) 横佐知子著『医心方』巻第四、美容編、筑摩書房、1997年、5-6頁。
- 26) 日本内経医学会『難経集注』（濯纓堂本）2002年、39（3-4）

—40 (3-5) 頁。

- 27) 南京中医学院医経教研組著、浅川要、井垣清明、石田秀美他訳『難行解説』東洋学術出版社、1987年、142-144頁。
- 28) 前掲。『本草綱目』第五十二卷、人部一、1193頁。
- 29) 前掲。『黄帝内経靈枢訳注』第二卷、362頁。
- 30) 高橋秀実「免疫と漢方:《黄帝内経》に啓示された古代人の知恵」『日本東洋医学会雑誌』2013年、1-9頁。
- 31) 前掲。『黄帝内経靈枢訳注』第三卷、326頁。
- 32) 前掲。『黄帝内経靈枢訳注』第一卷、450-462頁。
- 33) 前掲。『黄帝内経靈枢訳注』第二卷、362頁。
- 34) 前掲。『黄帝内経靈枢訳注』第二卷、182頁。
- 35) 館野正美著『吉益東洞《古書医言》の研究』汲古書院、2004年、124-127頁
- 36) 章太炎著『章太炎医論』人民衛生出版社、1957年、6-10頁。
- 37) 安保徹著、『自律神経と免疫の法則—体調と免疫のメカニズム』、三和書籍、2004年、1-13頁、68-74頁。
- 38) Abo T and Kawamura T. Immunomodulation by the autonomic nervous system: therapeutic approach for cancer, collagen diseases, and inflammatory bowel diseases., Therapeutic apheresis. 2002, 6:348-57.
- 39) Fukuda, M., Moroda, T., Toyabe, S., Iiai, T., Kawachi, Y., Takahashi-Iwanaga, H., Iwanaga, T., Okada, M. and Abo. T. Granulocytosis induced by increasing sympathetic nerve activity contributes to the incidence of acute appendicitis. Biomedical research (Tokyo) . 1996, 17:171-181.
- 40) Watanabe M, Kainuma E, Tomiyama C, Oh Z, Koshizawa J and Nagano G. Does East meet West?—the association between oriental tongue inspection and western clinical assays of white blood cell subsets, Health, Scientific Research Publishing, Inc., 2015;7:801-818.
- 41) Nagano G, Kohizawa J, Watanabe M, Kainuma E and Oh Z. The correlation between traditional tongue inspection and modern assays of white blood cells. Eastern Medicine, Japan Eastern Medical Association, 2016;33:77-85.

Review Articles

Alopecia in Traditional Chinese Medicine and Modern Western Medicine --the association of Huangdi Neijing (Huangdi' s Internal Classic) and hair--

Zai gen OH¹⁾ Mayumi WATANABE¹⁾

1) Faculty of Health Sciences in Kansai University of Health Sciences

Background and Purpose: To discuss the pathology of alopecia, we investigated the relation between hair and body from two different standpoints - Traditional Chinese Medicine (TCM) and modern Western medicine. And then, it was revealed that they had high integrity.

Methods and Results: First, Huangdi Neijing(Huangdi' s Internal Classic), one of the oldest medical books in China, described alopecia as faduo. Second, a common writings on hair symptoms, which were associated with 'qi' and 'xue' , were found among below classics such as in Zhubing Yuanhou lun (Treatise on the Pathogenesis and Manifestations of All Diseases) and Beiji Qianjin Yaofang (Essential Prescriptions Worth a Thousand Gold for Emergencies). Those classics subsequently affected Yi Xing Fang/Ishimpo (Formulary from the Heart of Medicine), too. Third, those findings were investigated in the view of modern Western medicine.

Discussion: TCM doctors diagnose on the basis of 'qi' and 'xue' in common as their diagnoses have been based on the concept of Huangdi Neijing. In the view point of modern Western medicine, we focused on leucocytes because they circulate whole body like 'qi' and 'xue' . Granulocytes and lymphocytes, which have developed from monocytes (macrophages), are controlled by autonomic nervous system (ANS) via their receptors as well as other organs. Leucocyte subset (ratio of granulocytes and lymphocytes) and ANS (balance between sympathetic nerve and parasympathetic nerve) seesaw in the same way 'qi' and 'xue' do. Recent studies reported that alopecia in different TCM patterns showed different leucocyte subsets/ANS status.

Conclusion: From these investigations, we compared modern medicine with traditional medical theory and pathologically explained the relation between hair and body in dual viewpoints.

Key word: alopecia, Traditional Chinese Medicine (TCM), Huangdi Neijing (Huangdi' s Internal Classic), white blood cell subset, autonomic nervous system (ANS)
